

研究報告 第170号 摘要一覧

神奈川県育成品種イチゴ‘かなこまち’の商品特性の把握と購買意向の解明

神奈川県育成品種イチゴ‘かなこまち’について、レギュラーパックおよび平パックの容器での商品特性を比較した。模擬流通試験および消費者調査から、本県の流通特性を活かした荷姿を検討した。模擬流通試験の結果、レギュラーパックと比べて、平パックは熟度の高い‘かなこまち’の果実を輸送する容器として適していた。また、購買意向を調べた結果、レギュラーパックは消費者からの選好度が高いと予測された。一方で、平パックは消費者からの選好度は低かったものの、高級であるとの認識があり、贈答用としての需要が高いことが示された。また、平パックは想定される購入用途がレギュラーパックより多く、贈答用としての選択肢を広げることが可能であると推察された。さらに、試食により、熟度の高い‘かなこまち’を購入したいとの回答が多く、「完熟」が付加価値になることが判明した。以上より、‘かなこまち’の平パックは贈答用に適しており、有利販売するためには、大果を印象付ける、都市近郊の本県だからこそ提供可能な「完熟」を強調する、品種説明を示すなどの販売方法を工夫することが重要であると考えられた。

ウメ新品種‘翠豊’の育成経過とその特性

県内の青ウメ主要品種‘白加賀’は収量が低く、着果も不安定なため、安定的に高収量が得られる品種が求められていた。そこで、‘白加賀’の自然交雑実生から選抜し、‘白加賀’と同時期に収穫でき、結実性に優れ、果実は大粒でヤニ果発生率が低い早生青ウメ新品種‘翠豊（すいほう）’を育成した。育成地（神奈川県平塚市）における収穫盛期は6月4日で、収穫果中の2L規格果（直径が36mm以上の果実）率は84%，果実重は31.8gと大粒である。また、10a当たりの換算収量は2016年～2020年のすべての年で2.0t以上と‘白加賀’に比べて多収である。

トマトの主要病害虫に対する総合防除体系の検討

2021年および2022年の2年間、施設トマト栽培の抑制作型において、防虫ネットや害虫忌避剤、天敵製剤等の各種資材と慣行使用薬剤を組み合わせた総合防除体系の防除効果を確認する試験を行った。総合防除体系区での主要な資材として、0.6mm目合い赤色防虫ネット、グリセリン酢酸脂肪酸エステル乳剤、プロヒドロジャスモン液剤、スワルスキーカブリダニ製剤および試験実施時点で未登録の新剤などを用いた。また、慣行防除体系区での主要資材には0.4mm目合い白色防虫ネットおよび慣行使用薬剤を用いた。2年間の試験を通し、トマト抑制作型における最重要病害であるトマト黄化葉巻病の発病株率は、供試トマト品種における抵抗性の有無にかかわらず総合防除体系区と慣行防除体系区で同等であった。また、アザミウマ類をはじめとした他の害虫の寄生や被害は確認されず、本総合防除体系の有効性が確認された。

ミニトウガン (*Benincasa pruriens f. hispida*) の夏播き栽培における播種時期が収量に及ぼす影響および収穫終期

神奈川県三浦市で9月～11月に収穫するミニトウガン‘ミニとうがん2号’の夏播き栽培において、本作型の導入効果を最大限確保できる播種時期および秋季出荷の需要に対応可能な期間を明らかにするため、6月上旬播き、6月下旬播きおよび7月上旬播きの3区を設定し、播種時期の違いが可販果収量に及ぼす影響、および収穫終期を分析した。結果、9～11月の可販果収量を確保しつつも、8月中旬が収穫期に含まれるよう、播種時期を遅くとも6月上旬とすることが収量確保上、適切であることを明らかにした。また、最大果実肥大期間平均速度の減速が、担果数減少の抑制につながり、10月中旬以降に着果ピークが生じなかったこと、および、外観品質を低下させたことにより、規格品の収穫終期が早まり、11月中下旬となっていることを明らかにした。